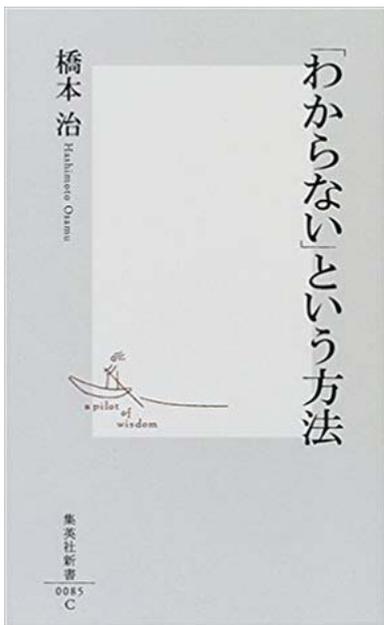


2019. 4. 20

アルケミストの小部屋

「『わからない』という方法」という不思議な題名の本を読んで



目次

- 第1章 「わからない」は根性である（「わからない」という恥；「わからない」を「方法」にする方法 ほか）
- 第2章 「わからない」という方法（私はなぜ「セーターの本」を書いたのか；「わかる」とはいかなることか ほか）
- 第3章 なんにも知らないバカはこんなことをする（基本を知らない困った作家；天を行く方法—「エコール・ド・パリ」をドラマにする ほか）
- 第4章 知性する身体（この役に立たない本のあとがき；知性する身体）

内容紹介（Amazon）

この本のタイトルはヘンド、と思ったあなたへー著者初のビジネス書!?

「わからない」ことが「恥」だった二十世紀は過ぎ去った！ 小説から編み物の本、古典の現代語訳から劇作・演出まで、ありとあらゆるジャンルで活躍する著者が、「なぜあなたはそんなにもいろんなことに手をだすのか？」という問いに対し、ついに答えた、「だってわからないから」。かくして思考のダイナモは超高速で回転を始める。「自分は、どう、わからないか」「わかる、とは、どういうことなのか」……。そしてここに、「わからない」をあえて方法にする、目のくらむような知的冒険クルーズの本が成立したのである！

本書のタイトルはやはり変である。日本語的に成立しているかは疑問である。「『わからない』という答え」、これなら日本語としての意味が通じるのだが、方法となると果たして意味が通ずるかは???である。この禅問答にも似た本のタイトルから、どのような考案が飛び出すか。これが本書の狙いであるようにも思う。

「わからない」と聞けば、それに続く言葉は「教えてください」が最もふさわしい。これが日本人のスタンダードだ。とはいうものの、何でもかんでも教えてくださいと安直に聞いていたのでは、身につくべきものも身につかない。よく考え、その上で、できれば自分自身の答えをもって聞いてみる。その答えが間違っていたとしても得られるものは大きい。

「教えてください」という勇気が持てたととしても、答えが返ってくるとは限らない。中学、高校、大学、資格試験には唯一無二の答えが用意されていたが、21世紀の実社会では答えがある保証などどこにもない。「目的」にたどり着くためには「何が必要」であるかを考えなければならない。「何が必要」かが明確化されなければ目的にたどり着けない。

「目的」と「何が必要」の関係をあれこれと考えることになるが、その時、「何が必要」に関して自分自身が何を知っていて何を知らないのかを明確にすることが求められる。「無知の知」である。知ったかぶりはいけない。怪我の元である。確実にこの関係性を満足できる答えが得られれば良いが、その関係性が不明も複数存在するだろう。また、関係性が非常に強いがその必要なことが実現できる可能性が不明な場合もある。そのようなときに、やるのか、やらないのか。本書の著者の言葉を借りればわからないからやってみようとなる。

本書に次のような文章がある。「学習—つまりは、『すでに明らかになっているはずの“正解”の存在を信じ、それを我が物としてマスターしていく』である。ここでは『正解』に対する質問はタブーだった。それが『正解』であることを信じて熱心に学習することだけが正しく、その『正解』に対する疑問が生まれたら『新しい正解を内含している（はずの）新理論』へとはしる。これが一般的なあり方だった」これが20世紀までの社会の在り様であった。21世紀は「わからない」「答えのない」時代である。この方法は通用するとは限らない。

答えを人に求めても答えは返ってこない。自分の頭で考えて、実際にやってみなければわからない。やってみれば何らかの知見・感触が得られる。その結果を見て、考えて、再びやってみる。自らの力でPDCAを廻していくことが求められる時代である。

「知らない人間」を相手にするときは、「相手がどこまで知らないか」を把握しなければならない。自分自身がすでに知っていることは「常識」と思っているが、これはあくまでも自分にとっての常識である。「知らない人間」を相手にするときは自分自身に対峙するよりもきっと大きなエネルギーを必要とする。そして、難しいことに、「知らない人間」が自分自身でその答えに思い当たったと思わせなければ、21世紀の教育とは言えない。

著者は最後に次のように結んでいる。

「わからない」は身体に宿る。これを宿らせたままだと、「無能」とか「不器用」としか言われたい。それはサナギの状態だから仕方がない。脳の役割があるのだとしたら、そのサナギになってしまった身体を羽化させるだけである。サナギを羽化させるために脳がすべきことを、私は一つだけ知っている。「自分の無能を認めて許せよ」——ただこればかりである。